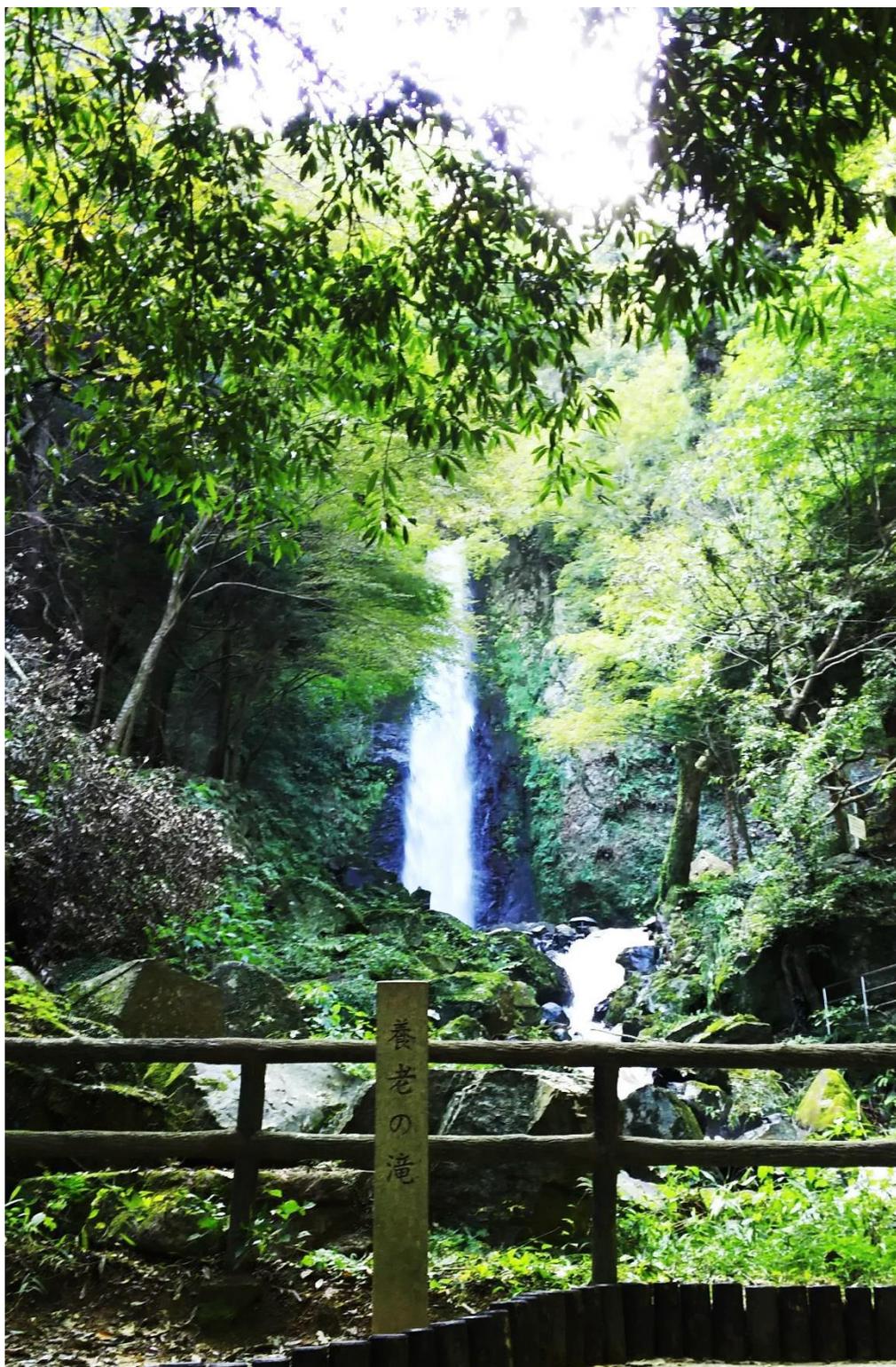


# “ 養老の瀧 ”



**岐阜県養老郡養老町 2017.10.31**

祝『養老改元 1300 年祭』

岐阜県にある、養老の瀧へと出かけました (^)/

2017 年は、泰澄大師による“白山開山”から、1300 年の節目の年  
同じく“養老改元 1300 年祭”の養老町が気になり、ネットで調べてみました！

ウィキペディアによると、泰澄大師は  
「養老 6 年、元正天皇の病氣平癒を祈願し、その功により神融禪師(じんゆうぜんじ)の号を賜った」  
とあり、“元正天皇”とは

「第 44 代天皇。父は天武天皇と持統天皇の子である草壁皇子、母は元明天皇。

文武天皇の姉。諱は氷高(ひたか)・日高、又は新家(にいのみ)。

日本の女帝としては 5 人目であるが、それまでの女帝が皇后や皇太子妃であったのに対し、  
結婚経験は無く、独身で即位した初めての女性天皇である。

『慈悲深く落ち着いた人柄であり、あでやかで美しい』と記されている。

歴代天皇の中で唯一、母から娘への皇位継承が行われた。これを女系継承とする考えもあるが、  
父は草壁皇子であるため、男系の血筋をひく女性皇族間の皇位継承である。」とありました。

男系の継承が当たり前とされる中で、“母から娘”へと引き継がれたものは  
形(式)を超えて、いと尊きもの。。。元正天皇の凛としたお姿が、胸に迫る思いがします

岐阜大垣地域ポータルサイトによると

「今から約 1300 年前の西暦 717 年(靈龜 3 年)、奈良時代の女帝・元正天皇が  
養老へ行幸されました。その時に訪れた美泉(菊水泉)に感銘を受け、  
『醴泉は、美泉なり。もって老を養うべし。蓋し水の精なればなり。天下に大赦して、  
靈龜三年を改め養老元年と成すべし』との詔を出し、元号を「靈龜」から「養老」へ改元されました。  
この改元は養老町の成り立ちに大きな影響を与え、現在まで元号を町名として残す  
数少ない地域となったのです。」と記されています

また、元正天皇の勅願によって、行基が創建したとされる、芳賀寺(福井県小浜)の御本尊  
“十一面観音菩薩立像”(重要文化財)は、元正天皇を写したものであるそうです



「若狭小浜のデジタル文化財」より

泰澄大師、元正天皇、養老の瀧(菊水泉)、十一面観音菩薩…、

そこから連想されるのは、白山菊理姫！！

養老神社の御祭神は、なんと、

**菊理媛神、菅原道真、元正天皇、聖武天皇、天照大神**

となっていました！(\*^^\*)

元正天皇の来歴の中に、

「養老4年に『日本書紀』が完成した」とあるのをみて

「菊理姫は、日本神話においては、『古事記』や『日本書紀』本文には登場せず

『日本書紀』の一書(第十)に、一度だけ出てくるのみである」

との文面が思い出されました

この一書は、“泰澄大師”と“元正天皇”の出会いから生まれたのでは？

そんな風に想像すると、ワクワクしてきます！

**愛と光の未来からやってきた“白山菊理姫”、日本神話登場?!**

(\*^^)v

今まで教わってきた歴史が、実はまったくのデタラメ?であったという話を、よく耳にします

日本神話とは、日の本(太陽の国)を大切に思う“日本人の心”ではないでしょうか

**私達の信じた事が、未来(歴史)になる!!!**

愛と光(希望)の世界は、私達の思い=意識の力が創造していくのだと思います!!

10月末日、いざ養老町へ(^^) /

二度の台風の後、空気は澄み渡り、ポカポカ陽気です

養老駅から徒歩で、日本の滝百選、名水百選でもある“養老の滝”へと向かいました

養老公園内には、家族みんなで楽しむ事のできる、遊園地や運動公園がありますが

その日は、3連休前の平日でもあり、とても静かでした

私にとって水音は、故郷を思いだす、懐かしい響きです

どんどん大きくなっていく、せせらぎに癒されながら、坂道を上っていくと、

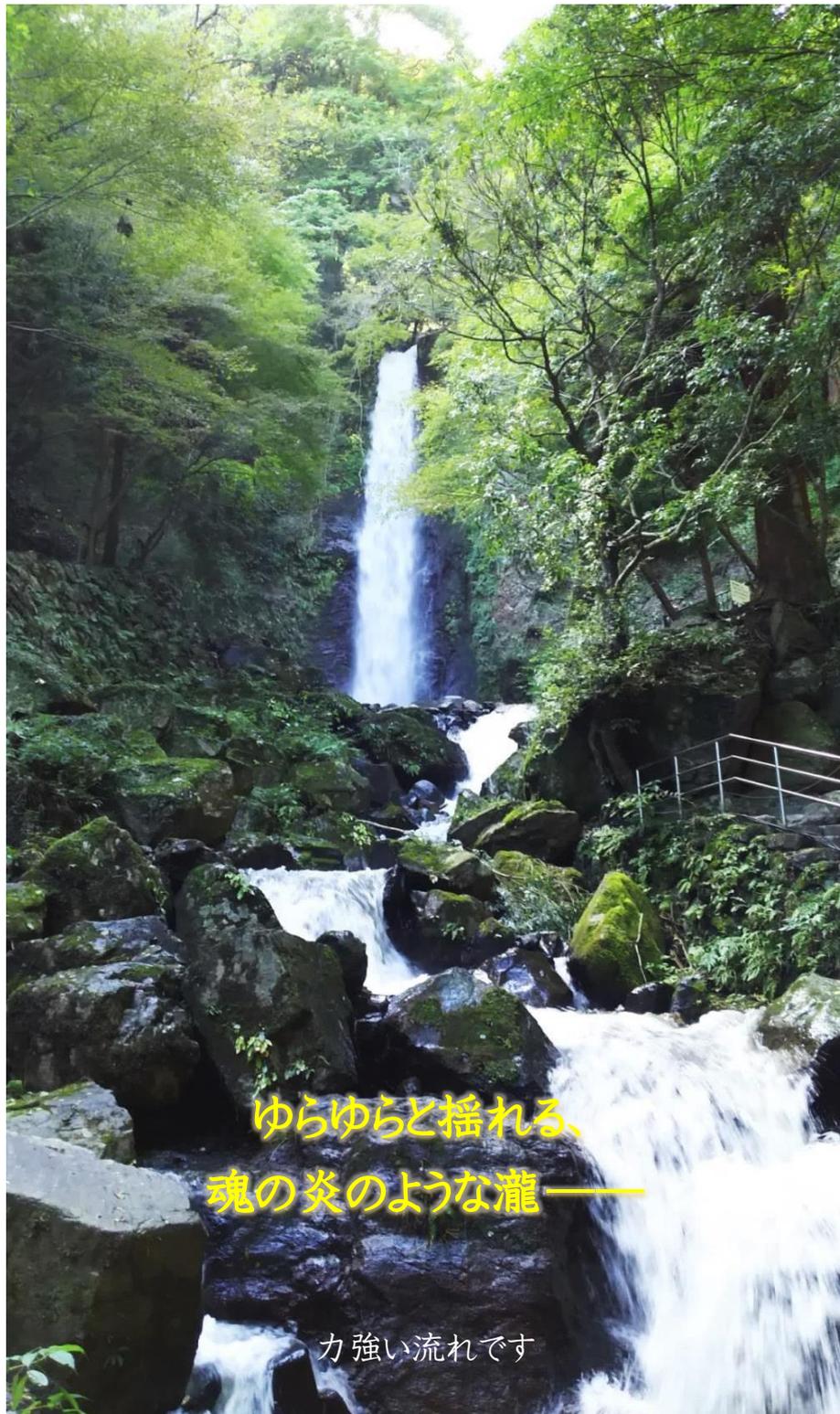
川の流れが、まるで黄金色の光の雫のように、眩しく輝いて見え、ハッとしました

その源への憧れが、いつそう強くなっていきました



瀧が姿を現わしました！





わけもなく嬉しい！のは何故？

水は、根源の光が物質化したもの、“光の器”と言われます

“水”という、凝縮された莫大な“光”が、しぶきとなって押し寄せてくる…

体中の“水”が共鳴し、喜んでいる？ 魂の故郷を、感じている？

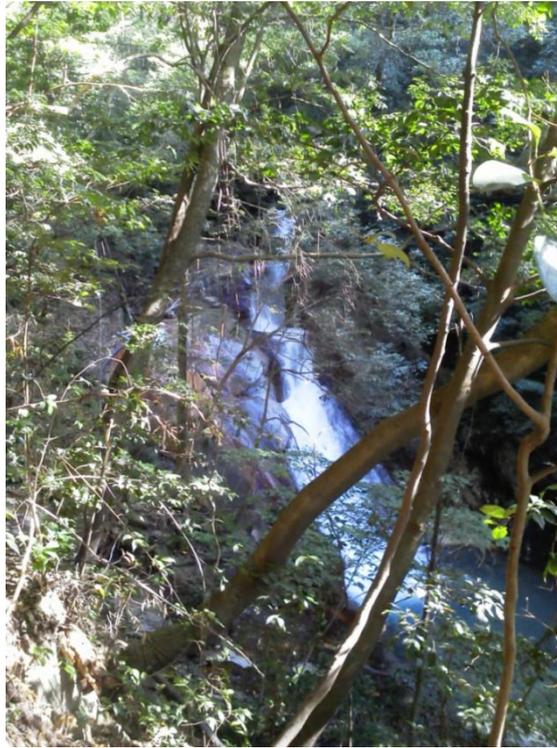


**瀧は、神なる力**  
**光エネルギー！！**

と、改めて思いました！

前に、どこかで見たことがあるような気がします。。

2012年10月の九州、霧島？



宿泊場所から、NMCAA セミナー会場へと向かう途中  
「布引滝」と書かれた標識が目に入り、道路脇を下へと進んでいくと、

現れた光景に **ドキリ！**

決して、出会うはずのないもの、触れることの出来ない崇高なものに  
遭ってしまったような感覚。。。「畏れ」という表現がぴったり

**銀河に吸い込まれていく感じがします**

どこかで、「神話は、神話」としか思っていなかった私にとって  
天孫降臨の地、霧島でのセミナー（神事）へと向かう日の朝の出来事は、衝撃でした  
アセンションの学びの中では、いつもの事でもあります  
受け取った圧縮ファイルを解凍していくように、後になって、ようやく理解することが出来る  
その時の地上セルフにとっては、一杯いっぱい体験でした  
早朝、自宅から車で駅へと向かう薄明かりの道、行く手には、鮮明な虹のアーチが浮かび上がり  
驚きは喜びへと変わり、辺り一面が、その歓喜の大嵐に包まれていることに気がきました  
今ここに、存在するのは、私だけではない。。

私と同じ思いで、この世界をみている、何者かがある——

自分とは別のものと考えていた、まわりの景色全てが、“たった一つの心”であったのだとわかり  
宙に向かって、一緒になって、喜びの拍手をしている、自身(神)がありました  
これから起ころうとしていることが、どれほどのことなのかを、地上セルフが受け止めていました

これから述べる事が、日本と日本人にとって最も重要なのですが、  
その新マクロ宇宙(NMC)が創造される時、天界全体からの強い要請により、  
中心の核は、日本神界で天照、天照皇太神界と呼ばれるエネルギーとなりました  
それは一なる至高の根源の光、根源の太陽そのものです

—『天の岩戸開き Ai』—

天孫降臨(ディセンション)、そして、帰還！=根源太陽へのアセンション！！

今ここ、地上にすべてがある

“根源天照皇太神”による NMC 始動宣言！！が  
全宇宙に鳴り響きました！



< 高千穂峰と、霧島神宮古宮跡 >

この写真は、その日、偶然撮っていたものですが、準備されていた！と感じます

(^^\*) /

車の中で一人、拍手をしている私を誰かが見ていたら、きっと変な人に間違えられる…(笑)

頭の隅で、そんな事を考えている自分もいて、だからこそ、この出来事は

アンビリバボー、アメージング！の神話=“真話”なのでした！

「アセンションとは、SF を大きく超えた、アメージング、アンビリバボーであり、それを肌で実感し始めたら、真にアセンションの過程に入ってきたとも言えるでしょう！」

『天の岩戸開き』にある、スピリチュアル・ハイラーキーからのメッセージは、  
本当に、本当なのです (^)/



布引の瀧(神戸)  
2012.4

時に、  
荒々しく険しい流れであったり、繊細で美しい光であったりする“瀧”は  
“龍”であり、根源の光が動く様、生命エネルギーの流れ、そのものなのだと思います！  
龍体“日本”から、根源の光が、世界へと広がっていきます！！

瀧を後にして、養老神社へと向かいました





“動から静へ——” 中心(故郷)への回帰のような、安らぎを覚えます

キラキラとしたクリスタルの空間と、輝く太陽の世界を感じます

御祭神は、菊理媛神、菅原道真、元正天皇、聖武天皇、天照大神

私が菊理姫に一番感じるのは、“透明感”であるような気がします

それは、究極の光のポータルとなり、∞のパワーを生み出す可能性でもあります

NMC 核心

根源の究極の愛の太陽、“根源天照皇太神”

元正天皇も、“同じ光”を、観ていたのかもしれない……

時間や空間を超越した、“核心の光”として、今共にある喜びに打ち震えながら

“愛の星地球創生！！”を誓いました

地球は、一滴の水からはじまった！

地球は、根源の光の大地——

泰澄大師が創建したと伝えられる“那谷寺”は  
石川県小松市にある、白山にゆかりの深い、高野山真言宗別格本山です  
祖母の生家が移築され、宝物館(普門閣)となっている所でもあり、  
故郷の温もりを感じる、私の大好きな場所です

寺伝によれば、養老元年(717年)泰澄法師が、  
越前国江沼郡に千手観音を安置したのが始まりとされる。  
その後寛和2年(986年)花山法皇が行幸の折、岩窟で輝く観音三十三身の姿を感じ、  
求る観音霊場三十三カ所は、すべてこの山に凝縮されるとし、  
西国三十三観音の一番「那智」と、三十三番「谷汲」の山号から一字ずつを取り  
「自主山巖屋寺」から「那谷寺」へと改名  
(ウイキペディアより)

日本最古の、観音巡礼霊場である西国三十三所、“那谷寺”の名前の由来となっている  
第三十三番札所、満願・結願寺院の「谷汲山華巖寺」が、  
岐阜県にあることがわかり、行ってみたいくなりました！

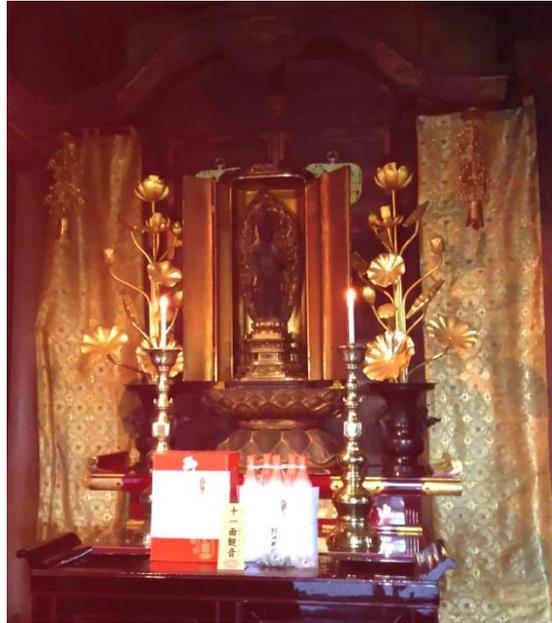


久しぶりの遠足(笑)、もう、紅葉の季節なのですね (\*\*^\*)  
交通の便が今一つ^^;で、移動に時間がかかってしまったこともあり  
人影少なく、開いているお土産屋さんもまばらです

あれ?! 本堂の左手間近、最初に目に飛び込んできたのが

**十一面観世音菩薩?!**

こんな所にどうして? 不思議な気がして、近くにいた方に尋ねると、  
御本尊御前立特別拝観の、今日が最終日との事でした!



待っていて下さった？かのような気がして、込み上げるものがありました  
穏やかで、優しく、美しい、“月の光”を感じます

#### 「谷汲山の縁起」 華嚴寺ホームページより

「谷汲さん」の愛称で親しまれる当山は、山号が「谷汲山(たにぐみさん)」、寺号が「華嚴寺(けごんじ)」といいます。

寺の草創は桓武天皇(737-806)の延暦十七年(798)で開祖は豊然上人、本願は大口大領です。

奥州会津の出身の大領はつねづねより十一面観世音の尊像を建立したいと強く願っており、奥州の文殊堂に参籠して一心に有縁の霊木が得られるようにと誓願を立て、七日間の苦行の末、満願(七日目)の明け方に十四、五の童子(文殊大士と呼ばれる)の御告げにより霊木を手に入れる事が出来ました。

霊木を手に入れた大領は都に上り、やっとの思いで尊像を完成させました。

そして京の都から観音像を奥州へ運んでいこうとすると、観音像は近くにあった藤蔓を切って御杖にして、御笠を被り、わらじを履いて自ら歩き出しました。途中、美濃国赤坂(現:岐阜県大垣市赤坂)にさしかかった時、観音像は立ち止まり、「遠く奥州の地には行かない。我、これより北五里の山中に結縁の地があり、其処にて衆生を済度せん」

と述べられ、奥州とは異なる北に向かって歩き出しました。

そうしてしばらくした後、谷汲の地に辿り着いた時、観音像は歩みを止め、突然重くなって一步も動かなくなったので、

大領はこの地こそが結縁の地だろうと思い、この山中に柴の庵を結び、三衣一鉢、誠に持戒堅固な豊然上人という聖(ひじり)が住んでいたもので、大領は上人と力を合わせて山谷を開き、堂宇を建てて尊像を安置し奉りました。すると堂近くの岩穴より油が滾々と湧き出し尽きることが無いので、それより後は燈明に困ることが無かったといひます。

「奥州には行かない」って、そんなのあり？(笑)と、思ってしまった私ですが  
すべての仏様は、それぞれの地における、明確な役割と、使命感をもって存在していることを、  
再認識し、反省しました！

本堂正面には、真っ赤な“日の丸?! ”が。。。?



帰宅後に、来年(2018年)は、「西国三十三所 草創1300年」であることを知りました

その記念事業に関する案内文によると

「養老2年(718)、大和国長谷寺の開山徳道上人が病で仮死状態となり  
冥途で閻魔大王に出会った。その時、巡礼によって人々を救うように託宣を受けるとともに  
起請文と三十三の宝印を授かり、現世に戻された。その法印を証として霊場を定めた」とあります  
ここでも、「1300年」というキーワードでつながりました！

そして、2018年の華嚴寺特別拝観は、「大日如来」！(\*^^\*)

まさに、「日の丸」の意味するもの、時代の変遷、太陽の世の到来！！を感じます

子供の頃は、村の年中行事となっていた報恩講など、慣れ親しんだお寺さんですが

今では、ほとんど触れる機会がありません

寺内を一巡して感じたのは、仏様に対する、いたましさのようなものでした  
奈良時代から長きにわたり、巡礼の最終・満願の、この地に寄せる人の思いは、  
どれほど重く、切ないものであったでしょう。。

いつの日も、誠にありがとうございました

これからは、人の笑顔の中で、安らかな日々を共に過ごしていきますよう

幸せの国 日の本、世界を、皆で創造してまいります！！

合掌

2017. 11. 5 善美 rumines